舵を切る

～四賢婦人・矢嶋楫子の生涯～

文＝福永無想

第二十一回「満州の再会」

楫子の元に吉報が入ったのは明治31（1898）年のこと。民法で一夫多妻制禁止が決まった。長くこの国では、財力や地位のある男たちが何人も妾を囲うことに抵抗がなく、重婚の罪の意識など皆無であった。この法改正は日本女性の人権を認める第一歩となったが、楫子にはまだやらねばならぬことがあった。

大正10（1921）年、楫子は娘の達子などを伴い、神戸港から満州の大連へ向かった。5月の初めとはいえ、大陸の夜は肌寒い。大連の港に着港したのは夜の9時頃で、南満州鉄道が経営する大和ホテルに到着したのは遅い時刻だったにもかかわらず、多くの関係者が楫子たちを迎えた。大連滞在の6日間では毎日のように大集会が開かれた。最終日、大連矯風会の発会式を見届けた楫子には、ぜひとも訪れたい場所があった。

旅順港を見下ろすように、白玉山に立つ慰霊塔。ここに、先の日露戦争で命を落とした約2万4千人の日本兵士たちが眠っている。

「西の方角に見えるのが、二百三高地です」

案内してくれた旅順駅長の久保田が指をさす。小高い山を見つめながら楫子は、教え子の大川スギ子が言った言葉をかみしめた。

「兄は二百三高地の激戦で命を落としました。矢嶋先生には慰問袋ではなく、『戦争の罪』を叫んでほしかった」

今でもスギ子の声が離れない。89歳の体にむちを打ち、こうして大陸へとやって来たのは、数々の戦で失った尊い命の大切さと、愛と平和を説くためでもあった。楫子は、深く祈りを捧げた。

■

旅順から北上し、奉天の手前の海城へ向かう。ここには妹の河瀬貞子たちが家族で移り住んでおり、楫子は再会を果たすことを楽しみにしていた。貞子は、今回伴っている次女の達子を、母親がわりとなり育ててくれた恩人である。

夕刻に到着した海城の駅舎は石造りの立派な佇まいで、南満州鉄道の偉容が見てとれる。停車場では海城婦人会の女性たちが紫の旗を押し立てて、楫子ら一行を盛大に出迎えたのだった。

海城の駅前通りは道幅が驚くほど広く造設され、長い並木道が続き、馬上の関東軍の軍服も多く見かけた。到着早々、楫子らは人力車に乗り込み公会堂に向かう。その夜の集会で何百人という在留日本人を前に講壇に立つ楫子の姿を、貞子たち家族も見守った。

「お勝姉さまのお姿。妹として、これほど名誉なこつはなかですばい」

そう言って貞子はこの時、83歳の身をもって自ら会員となった。子どもがいなかった貞子ら夫婦は、兄・源助の3男の三平を養子にすると、河瀬家筋の家から民子という娘を嫁に迎えた。夫の典次とは早くに死に別れた貞子だったが、三平らとのほほえましい暮らしが支えとなった。

日露戦争終結で南満州の権益を日本が勝ち取ると、満州に移住する人々の動きが始まった。三平ら家族も海城に開拓民として入ることを決めたが、長男だけは熊本におくことになり、貞子も残り春竹の家で孫息子の世話をした。海城に渡った日本人は450人ほど。三平は広大な農場を手に入れ大豆を栽培すると豆腐店も営み、事業が軌道に乗った3年前に貞子を呼び寄せていたのだった。

「とこっで、お勝姉さまの隣のご婦人は、どなたでっしょ？」

「やだ貞子おばさん。私たい私、達子たい」

貞子は目をキョロキョロとさせたが、しばらくしてそれが達子だと分かると、

「ほんなこつ達子かい」

そう言って達子の顔に両手をあて、涙を浮かべると胸に引き寄せ、よしよし、と昔のように頭をなでた。

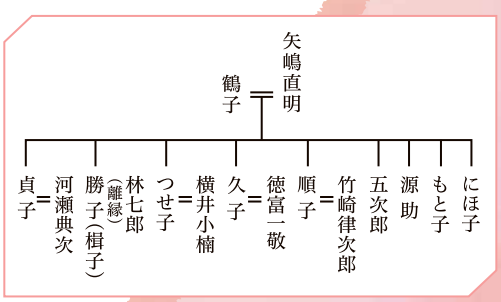
「80過ぎた貞子が満州に渡ると聞いた時は心配したばってん、三平さんらが付いとんなはるけん安心したたい。あらら、つい益城弁がひっと出た、ほーほほっ」

貞子につられて無意識に口に出たお国言葉に楫子が一人でに大笑いすると、周囲も手をたたいて笑い合った。三平の妻の民子がもてなす豆腐尽くしの料理はどれも味わい深く、楫子はつかの間、懐かしい温もりに包まれた。

この再会の翌年、貞子は静かに息を引き取った。穏やかに慎ましく生きた84年の人生であった。

※この物語は、矢嶋楫子の資料をもとに描いたフィクションです

※参考文献＝「矢嶋楫子伝」（徳富蘇峰・監修、久布白落実・著/不二屋書房）、「矢嶋楫子の生涯と時代の流れ」（斉藤省三・著/熊日新書）、「熊本のハンサムウーマン」（堤克彦・著/熊本出版文化会館）、「矢嶋楫子伝 われ弱ければ」（三浦綾子・著/小学館文庫）、「明治女性史」（村上信彦・著/理論社）、「まんが四賢婦人物語」（益城町）



四賢婦人記念館

益城町杉堂1250　電話/286-4959
開館/9時30分～16時30分　休館/月曜（祝日の場合は翌日）
入館料/一般・高校生200円（160円）、小中学生100円（80円）
※（　）は30人以上の団体割引料金